

2010年「国民読書年」記念事業 つがる市読書シンポジウム

パネルディスカッション
テーマ 読書・ことば・活字く広がる心

基調講演
演題 本は心の扉 世界への窓
講師 八戸短期大学客員教授
三村 三千代 氏



2010
国民読書年

読書の大切さ再発見

2010年「国民読書年」記念事業 つがる市読書シンポジウム

先人たちの長年の苦勞や工夫のおかげで文字が生まれ、文字のおかげで人間は時間と空間を越えて言葉を伝えることができるようになりました。その文字によって本が生まれ、今ではものすごい数の本が出版され、身近に読める本がたくさんあるということは幸せなことです。本を読むことで世界中、歴史上のいろいろな人と出会い、さまざまな知恵や知識を得ることができます。「世界への窓」となります。もうひとつの大切なことは、自分の心と向き合う、自分の「心の扉」を開けてくれます。特に自分自身を見つめ直す思春期に自分にぴったりの本と出会えれば幸せです。

私自身の読書の思い出の中から好きな本を紹介します。

「赤毛のアン」。子どもの頃大好きで、アンのことばかり追いかけて読んでいました。最近読んでみたら、私の読み方に違いがあることに気がつきました。母親代わりのマリラという女性のすばらしさ、アンの良さを深く理解しているという点に気づきました。いい本とは何度読んでも読むに堪え、自分の精神状況によって違う読み方ができる本。それがその人にとっての良本だと思います。

本に触れ合う生活をしていけば、その時の自分に必要な本に巡り会えると私は信じています。本が「読んで」と知らせて、なんとなく浮き出て見えるのです。そして子どもたちに本と触れ合う機会を意識して作ってほしいです。肩肘張らずに、読み聞かせてあげたり、図書館へ行ったり、買い物ついでに本屋に寄ってみたり。本は世界への窓を開け、心の扉を開いてくれます。一人一人の生活の中で大切にするとともに子どもたちにも伝えていただきたいと願います。

(基調講演より抜粋)



基調講演 「本は心の扉 世界への窓」

八戸短期大学客員教授 三村 三千代

「読書の秋」―国では読書への国民の意識を高めるため、2010年を「国民読書年」と定めています。

10月3日、松の館で特定非営利活動法人つがる野文庫の会平川智枝子理事長、主催の「つがる市読書シンポジウム」が開催され、約150人の市民らが参加しました。

この日は、市内小中学生の読書感想文の表彰と発表が行われた後、八戸短期大学客員教授の三村三千代氏が基調講演。引き続きパネルディスカッションが行われ、読書の大切さや本に親しむ環境づくりについて理解を深めました。



1) 幅広い年代の市民らが参加 2) 稲垣読書愛好会・蝦名桂子さんの「語り部」おなほし会 3) 読書感想文を発表する澁谷洋樹君 4) 最優秀賞を受け取る澁谷未来さん

「読書ことば・活字くひろがる心」

川嶋 最近インターネットの普及で活字離れが叫ばれています。各界の皆さん、それぞれの立場での活動を紹介ください。

雪田 現在、来年青森で開かれるNIE「教育に新聞を」の全国大会の準備にあたっています。NIEとは、小学校から大学、生涯学習の講座などで新聞を使って勉強をしていただく、学校で手を挙げていただく購読料を補助して新聞をお届けして、新聞を読んでもらうという事業です。

秋田谷 私は高校、中学、小学校

の子どもを持つ母親です。向陽小学校では学校の図書活動と朝読ボランティアとして読書の読み聞かせのお手伝いをしています。また、お話サークル「おひさま」に所属して、学校や老人ホームで読み聞かせ活動もしています。

平川 昨年8月、読書推進と地域活性化交流を目標に「つがる野文庫の会」を立ち上げ、今年7月にNPO法人の認証を得、現在会員数は33人で公民館の一室を事務所として活動しております。読書に親しむ環境づくりとして、竹内俊吉氏から寄贈された竹内文庫、廃校になった小学校から譲り受けた蔵書を活用して手作り図書館として運営しています。子どもたちへの読み聞かせ活動や「音読いきいき教室」、自分の誕生から現在までの大きな出来事を記録として残しておく「自分史講座」も開催しております。

川嶋 父兄も一緒になって読み聞かせのお手伝いをする活動です。最初は集中できない子が多かったんですが、続けるうちに楽しむ子が増えてきました。朝読書の10分間は心を落ち着かせる大切な時間です。それから、先生方が中心となって、各学年ごとに20冊の必読図書を選んだり、読書祭を開催して担任以外の先生や子どもたち自身が読み聞かせをしたり積極的に本を楽しんでもらう工夫をしています。

川嶋 図書館建設は近づいてきているのでしょうか？

宮本 図書館建設の計画は今のところはありません。学校、公民館、資料館などさまざまな施設の耐震基準や老朽化の問題があり、優先順位に沿って予算措置を行っているところです。優先的に取り組むものといえば学校でしょうね。私のまわりの個人の考えですけど、今後いつ頃になるか全くわかりませんが、公民館を建設することになったら、図書館を併設するという考えもあるのではないかと思います。公民館のワンフロア全

- パネリスト
三村 三千代 (基調講演講師)
雪田 知宏 (東奥日報社読書部長、元木造支局長、「教育に新聞を」青森県NIE推進協議会事務局)
秋田谷 敦子 (向陽小学校PTA図書委員)
宮本 裕士 (つがる市教育委員会教育次長)
平川 智枝子 (NPO法人つがる野文庫の会理事長)
- コーディネーター
川嶋 大史 (あおもり映画祭実行委員長、NPO法人つがる野文庫の会監事)



川嶋大史氏

県内10市の中で図書館がないのは黒石市とつがる市ですので、早い機会に図書館のある市の仲間入りができるように教育委員会としても考えていかなければならない時期に来ているのかと思います。話は変わりますが、市内各地区に読書の会などがあり、子どもたちに本を読ませる、親しませるといふ活動を積極的にやっているという

秋田谷 朝読ボランティアは学校の中で朝の10分間を利用して、自分の好きな本を読んだり、先生が読み聞かせをする時間があります。本が好きな子もそうじゃない子もみんな一緒に本を読む。その中で

川嶋 小学校の朝読ボランティアや子どもたちの読書の状況について教えてください。



雪田知宏氏

雪田 木造中央公民館で月2回新聞を読んでいただったり、脳を活性化するために「天地人」というコラムや昔話などを活用し音読教室を行っています。60歳以上の方が20〜30人位参加しています。とても好評です。

平川 今60歳という結構若いですが、高齢者の方々は非常に一生懸命で学ぶことに意欲的だと感じております。ただ「音読」という言葉を聞いただけで、なかなか一歩踏み出せない方も多い



公民館で開催されている音読いきいき教室

体を図書館にすれば面積も比較的とれ、蔵書数も格段に増やせませす。専門職員によるコンピュータ管理ができれば、たとえ規模は小さくても図書館と呼ぶものができるのではないかなと考えています。

三村 図書館というのは箱物ではないかと思っています。つくり上げていくものだと思います。今ある竹内文庫とか図書室をまず活かして、使って、使えやすく工夫して、その延長線上にどういう図書館が必要かということ。ぜひ皆さんでつくり上げる図書館にしたいなと思っています。

川嶋 今後つがる市の読書環境を整えていくうえでどういうことができるかと思えますか？

平川 私たちはボランティアです。今の本を買う予算はありません。今のところ児童図書が約2千冊、一般図書が約2千冊ございます。最近、家にある本を寄贈したいという人もほつぽついらつしやいます。読書環境ということでは、読書する方としない方との温度差が



宮本裕士氏



平川智枝子氏

大きいと思います。子どもが本を読まなくなったのは、大人が本を読まなくなったからだと言言した方がございます。それが全てではないと思いますが、家庭の中で読書をする雰囲気とか、子どもと一緒に本屋に行ってみるとか、家の中で本のことを話題にするとか、そういうふうなことが読書の環境づくりとして、まずできることではないかなと思っています。

川嶋 そろそろまともに入ります。雪田さんお願いします。

雪田 今後、つがる市に図書館をつくる際には、各地域の公民館や読書団体の方の声を集めて計画してもらいたいなと思います。図書館の本については、今、古本屋とかも充実していて、すごい立派な本でも10年位経つと105円になりますから、そういったものも利用できればと思います。また、本だけじゃなくて新聞も活字の一環ですから、続けて読んでいただきたいと思っています。

川嶋 秋田谷さん、平川さん、こ

れからの夢や子どもたちにしたいことは何ですか？

秋田谷 まずは、積極的に本を楽しんでもらう環境づくりが一番大切なんです。地域も学校も先生方も父兄も協力し合って、これからは子どもたちが積極的に本を、あまり押し付けじゃなくて、それでも微妙につついたりして本を紹介していきけたらなと思っています。今改めて思うのは、私が今のよう活動ができるのは前に頑張ってきた先輩のお母さん方をはじめいろいろの方のおかげだと



ボランティアによる読み聞かせ活動

思っています。これを大切に、次の世代の若いお母さんやお父さん方の協力も増え、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄さん、お姉さん、先ほど楽しいお話を聞かせていただいた蝦名さんのようにいろんな方の協力を得て、みんな一丸となってやっていきたいなと思っています。

平川 学ぶ意欲の高い今のシニアパワーをなんとか子育てにも活用できないものかなと。そのためには異世代交流の活動を取り入れることによって、高齢者と子どもたちが一つの場において読書に関わる活動できれば、今求められている心の豊かさを育むことができるとは思いませんかと考えております。夢というんですか、先ほどからお話されてました市立図書館の建設というのには私たちがつがる野文庫の会の願いでございます。つがる市に図書館ができた暁には、文化の香りが高いつがる市に生まれ変わるんではないかなと私は密かに思っているところです。

川嶋 三村先生、最後に総括をお願いします。

三村 読書の大切さを子どもたちや次の世代に伝えていくという皆さんの意気込みがすごく感じられ、私もいい刺激を受けました。今日の話の中には出て来なかったんですが、iPadなどの電子書籍の普及によって今後読書の形態が変わっていくかと思えます。電子書



三村 三千代氏

籍は文字を大きくできたり、持ち運びが便利だったり。本には紙をめくる手触りや全体の中でどのあたりを読んでいるという感触だったり、背表紙から読んでみたい本を感じたり、それぞれの良さがあります。文字や本を通していろんなものを吸収し、いろんな人、いろんな所とつながっていききたいという思いがしっかりとあれば、読書のかたちが変わってきてくると思っています。これからの皆さんの読書生活がますます充実されることを願っています。

川嶋 ありがとうございます。

「児童・生徒読書感想文コンクール」入賞者

最優秀賞

学校名	氏名
柏小学校(1年)	三上 愛可
向陽小学校(6年)	澁谷 洋樹
木造中学校(1年)	澁谷 未来

優秀賞 (低学年の部)

学校名	氏名
向陽小学校(1年)	成田 圭吾
稲垣小学校(2年)	蝦名 遥
稲垣小学校(2年)	木村 紅葉
稲垣小学校(3年)	長内 長也
稲垣小学校(3年)	尾野もも花

優秀賞 (高学年の部)

学校名	氏名
稲垣小学校(4年)	中村 日南
稲垣小学校(5年)	木村俊之介
穂波小学校(5年)	濱山 愛美
穂波小学校(5年)	木村 琳
柏小学校(6年)	古坂 北斗

優秀賞 (中学校の部)

学校名	氏名
木造中学校(1年)	三上 瑠華